

## 「敵を愛しなさい」

マタイによる福音書 5:43-48

日本の国があつた第二次大戦に敗れて 76 年目の敗戦記念日を迎えました。あの敗戦の時、私は小学校の 2 年生でした。私は青森県の八戸で生まれ育ちましたが、そんな東北の田舎にも、B29 というアメリカの爆撃機が、時折爆弾を積んでやって来て、防空壕に逃げ隠れしました。八戸には、軍港がありましたので、艦砲射撃を受ける危険性があるというので、終戦の年は、子どもたち 3 人だけ、岩手県の山奥の知人宅に預けられました。父は薬局を営んでいた関係で、町内の救護班の責任があり、母と共に、町に留まらざるを得なかったのです。半年ほどでしたが、親元を離れ、子どもたちだけで知人宅に預けられ、寂しくて、毎日のようにおねしょをしていたことを思い出します。

その疎開先の小学校で、最初に習った漢字は、「鬼畜米英」という文字でした。先生はこの言葉を黒板に大書して、「アメリカとイギリスは鬼、畜生だ、日本は今、この鬼・畜生を退治するために戦っているのだ。君たちも早く大きくなって、兵隊さんになり。この鬼・畜生をやっつけるんだ」と、熱を込めて語られことを思い出します。ですから、幼い私も、大きくなったら当然のように「兵隊さん」になるんだと、思っていました。教育の影響力というもののはほんとうに大きいものだと思います。敗戦になって、八戸の町に初めてアメリカの兵隊が「進駐軍」として、ジープに乗って入って来た時、「鬼・畜生」とは、どんな顔をしてどんな格好しているのか、恐る恐る物陰から覗いて「なーんだ背が高いけど同じ人間じゃないか」と思ったものです。

今にして思うと、戦争とは、人と人が敵と味方に分かれて憎み合い、相手を「鬼・畜生」として殺し合う、意味のない非道なものだと、しみじみ思われます。

さて、今日の聖書の箇所は、イエスさまが「山上の説教」の中で、これまでの古いユダヤ教の教え(律法)に対する、新しい解釈、「福音」を教えておられる箇所です。先週は、5 章 21 節の「殺してはならない」という戒めから、「兄弟に腹を立てるな」、「ばか」とか「愚か者」などと言うな、自分に反感をいだいている人がいたら「早く和解しなさい」という、イエスさまの新しい教えについて学びました。

今日の 43 節でイエスさまが取り上げている「古い教え」は、「隣人を愛し、敵を憎め」という教えについてです。この「隣人を愛しなさい」という教えは、旧約聖書の至る所に記されている教えです。例えば、レビ記 19 章 18 節 b には、「自分を愛するように隣人を愛しなさい」という、新約聖書にもよく出てくる有名なみ言葉が記されています。ところが、「敵を憎め」という言葉は、旧約聖書のどこにも記されてはいないのです。むしろ出エジプト記の中には、「あなたの敵の牛あるいはロバが迷っているのに出会ったならば、必ず彼のもとに連れ戻さなければならない」(23:4)という戒めがあり、箴言には「あなたを憎む者が飢えているならパンを与えよ」(25:21)という教えさえ記されているのです。「敵を憎め」という教えは、旧約聖書のどこにも見当たらないのです。それではこの「敵を憎め」という言葉は、どこから出てきたのでしょうか？

おそらくこれは、「隣人を愛せよ」という戒めを、ユダヤ人たちが自分たちに都合よく解釈し、「隣人」を狭く、自分の家族や親族、あるいは部族や民族に限定し、「身内の

者や同胞を愛せよ」という意味にとらえ、その結果として、仲間以外のもの、同胞以外のものを「敵」として憎めと勝手に解釈し、そのように語り伝えられるようになったのではないかと考えられます。

人には、だれにもそういう傾向があるのですが、親しい者や、同じ考えや思いを持つ者だけが小さく固まり、立場の違う者、考え方の違う者を「敵」として排除してしまう傾向があります。そして、自分たちの内輪の結束を固めるために、相手に対する敵対心を高めたり、逆に、相手への敵意を高めるために内輪の結束を強めたりすることがあるものです。政治の世界に見られる派閥とか会派・分派というものがそれに当たりますが、それが、争いや対立の基となり、分裂や紛争を引き起こすことになるのです。民族と民族の紛争、国と国との戦争も、そのようにして起こるのではないのでしょうか。

「隣人を愛し、敵を憎め」。この考えは、まさに戦時中、わたしたちが教えられた教育でした。あの頃は、日本の国は天皇を神とする「神国」で、「万邦無比」（どんな国とも比べものにならないほど優れた国）で、「八紘一宇」（全世界が天皇を神とする一大家族のようなもの）という考えだったのです。そのような自国第一主義、偏った「愛国心」が、アジアの諸国を侵略し、悲惨な戦争を引き起こしたのです。

あの「鬼畜米英」という言葉にしても、愛国心を高め、国を挙げて一体となって、戦争するために造られたスローガンであったと思います。愛国心と敵愾心は、密接につながっているのです。自分の国や民族を愛し、誇りにするということは大事なことです。自分の国や民族のことだけを考えて、他国や他民族のことを無視したり、敵視するような考えが、紛争や戦争につながるわけです。自国を愛する時、私たちは、他国をも愛し、共に生きる平和への道を模索することが大切なのです。

イエスさまは、当時のユダヤ人たちが、隣人愛の教えを狭くとらえて、自分たちの仲間や、同胞を愛し、それ以外の人や異邦人を「敵」とみなして憎み排除していることに、心を痛めつつ、「しかし、わたしは言うておく、…」と、ここで新しい教えを説かれたのです。それが44節の「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」というみ言葉です。「あなたの敵をも愛せよ」と言うのです。

「敵」というのは、自分たちの仲間として受け入れられない他者のことです。つまり「隣人」として愛せないから「敵」なのです。その敵を愛せよ、と言うのですから、これは無理なことを言っているわけです。しかし、イエスさまは、その無理を承知の上で敢えて言うのです。「敵を愛しなさい」と。イエスさまの意図は、あなたの「敵」を「敵」としてみなさず、あなたの「隣人」として受け入れ、「隣人」として愛せよ、ということではないのでしょうか。つまり、他人を、「敵」か「味方」に、分けて区別し、扱い方を変えるのではなく、すべての人をあなたの「隣人」として愛し、受け入れよ、ということなのです。

しかし、現実問題として、目の前に、自分を憎み、自分に危害を加える「敵」がいる場合、その者を「隣人」として愛し、受け入れるということは、容易なことではありません。なぜ、イエスさまは、こんな厳しい「あなたの敵を愛しなさい」と言うようなことを言われたのでしょうか。「なぜ、敵を愛さなければならないのか？」このことについて、真剣に問い、そしてそれを実践した人として、マルチン・ルーサー・キング牧師

の名前をあげることが出来ると思います。

キング牧師は、ご承知のように、アメリカの黒人差別撤廃運動に命を捧げノーベル平和賞をもらった人です。彼は、イエスさまの「山上の説教」に導かれ、インドの独立を非暴力運動で勝ち取ったマハトマ・ガンジーの刺激を受けて、非暴力の街頭行進やバスボイコット運動などで、黒人の公民権を勝ち取るために闘った牧師です。彼は『汝の敵を愛せよ』と題する説教の中で、次のように述べています。「自分たちをことごとく差別し、子どもたちを脅かし、家庭に爆弾を投げ込み、危害を加える人種差別者たちを、どうして愛さなければならないのか？ なぜ、我々は敵をも愛さなければならないのか」、こう問いつつ、「敵を愛さなければならない理由として」4つのことを述べています。

- 1) 憎しみに対して憎しみをもって報いることは、憎しみを増すのみであり、すでに星のない夜に、なお深い暗黒を加えるからだ。暗黒は暗黒を駆逐することは出来ず、ただ光だけが出来るのだ。憎しみは憎しみを駆逐することは出来ず、ただ愛だけが出来る。憎しみは憎しみを生じ、戦争はさらに大きな戦争を生む。この連鎖反応を破らないと、我々はみな絶滅という暗黒に投げ込まれるだろう。
- 2) 憎しみは、魂に傷痕を残し、人格をゆがめてしまう。憎しみは、相手の魂を傷つけ、尊い命さえ奪う恐ろしい結果を招くが、それだけではない。憎しみを抱くその人も破滅させる。ある精神科医の言葉を紹介している。「憎しみは人格を切り裂き、愛は驚くべき仕方です、人格を統合する。愛せよ、さもなければ死んでしまう」。
- 3) 愛は、敵を友に変えることが出来る唯一の力である。憎しみに対して憎しみをもって立ち向かうことによって、絶対に敵を取り除くことは出来ない。愛だけが敵を友にかえる。(例:リンカーンが大統領に選ばれた時、選挙戦で彼を誹謗したスタントン候補を大臣の一人に任命し、最も信頼する友に変えた)
- 4) 最も根本的な理由として、神の御子であられるイエス・キリストご自身が、ここで「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と命じ、「あなた方の天の父の子となるためである」と語っておられるからだ。我々は自分の敵を愛することによってのみ、神を知り、神の子とされるのだ。

このような理由をあげて、キング牧師は次のような言葉でこの説教を結んでいます。「これまでの恐ろしい、醜悪な白人による人種差別に対して、我々も恨みに満ちた思いになり、憎悪には憎悪をもって報いたい誘惑にかられるが、もしそれをしてしまえば、我々が求めている新しい秩序は、これまでの古い秩序と少しも変わらないものとなる。我々は忍耐と愛をもって憎しみに立ち向かおう。われわれは人種差別を嫌悪しつつ、人種差別主義者をも愛すべきである。愛こそがあらゆる憎しみに打ち勝つ永遠の力なのだ」と。キング牧師は、そのような立場から、当時のアメリカ軍によるベトナム戦争にも反対し、愛と平和を訴えたのです。

「敵を愛し、あなたを迫害する者のために祈りなさい」。この主イエス・キリストのみ言葉は、分断と対立の危機の中にある今こそ、私たちが謙虚に受け止め、一人一人が身をもって従うべきみ言葉ではないかと思えます。

イエスさまは、ここで「あなた方の天の父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正し

い者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」(45 節 b)と述べておられます。神さまは、人を偏り見ることをなさらず、「敵」・「味方」という区別をなさらないのです。イエスさまは、ご自身を裏切って権力に売り渡したユダに対しても、「友よ」と呼びかけられました(マタイ 26:50)。また、十字架の上で、ご自分を十字架にかけたすべての人々のために「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているのか分からないからです」と、執り成しの祈りをしつつ息を引き取られました。イエスさまの生涯こそ、まさに「敵を愛し、迫害する者のために祈る」生涯でした。そこにこそ、輝かしい復活の勝利への道が開かれていたのです。

私たちも、「天の父の子となるために」すべての人を分け隔てなく愛し受け入れ、「平和を造り出す」ために共に祈り、努める者でありたいと願います。      アーメン